

LOVIN' HYOGO

地元を愛する人のための「地元を愛する」ストーリー

縁。 生まれ育った場所との縁。ふと訪れた場所との縁。そこで出会った人との縁や、仕事での縁、人がつないでくれた縁。いろんな縁がありますが、縁ができることで、その人にとっての「地元」になったり、「地元への愛」がより深まったりするのではないのでしょうか。実は兵庫には、そんな「縁」から広がった地元を愛するストーリーがたくさん。兵庫の各地で生まれている、さまざまな形の愛を、たっぷり紹介します。

CONTENTS ▶ すこいすと / 高校生チャレンジ留学 / TSUNAS / ひょうご農林水産ビジョン / ひょうご・こうべ女性活躍推進企業 / コ・ノ・ホ・シ / ひょうごTECHイノベーションプロジェクト / ひょうごオープンファーム / 多文化共生社会検討実務者会議 / すこいすと / リメンバー117 / ひょうごビジョン2050 / 万ぱくぱく一勝手に楽しむ“ひょうごフィールドパビリオン” / ひょうごSDGsスクールアワード / 私にとってのYELL / HYOGOミュージアム魅力発信プロジェクト / 兵庫県森林ボランティア団体連絡協議会 / ひょうご地域創生フェス「カケルDAY」

丹波市 居場所・役割 ひとの動き

誰もが心地よく集まれる “場”で、出会いを生み出す

「すこいすと」のひとり、清水健矢さん。24歳のとき生活の利便性が高く山に囲まれた田舎に住みたいと丹波移住を決意しました。空き屋になっていた「水分れ茶屋」を交流を生み出すコーヒースタンドとして復活させ、さらに自然豊かな青垣地区にはコワーキングスペースもオープンするなど自ら楽しみながら地域おこしを行なっています。「ダーツやバーベキューができる秘密基地みたいな空間も作って、メインスペースでイベントを開けるようにして、地域で働く人たちがゆるく繋がれたらと。今は起業セミナーや大学教授を招いてのワークショップ、アパレルのポップアップショップなど活用の幅が広がり地域外との交流も生まれてきたので、この流れが広がってくれたらと思います」

清水さんのインタビューはこちらでも読めます

すこいすと

「自分×仲間×地域」の熱量を携える「ひと」、「すこいすと」を紹介するウェブメディア。すこいすとたちの活動を通して、地域の活力となる「参画と協働」のヒントを発信している。



「すこいすと」
WEB



まわりの人々には幸せでいてほしい
そのほうが僕も楽しいですからね



水分れ茶屋



くう。
すむ。
おこす。

多様な学び・働き方

ラグビーの「楽しみ方」を ニュージーランドで体感、 日本で発信！

高校で先輩に誘われて、「たまたま始めたラグビーにハマってしまったという石井さん。『体のぶつかり合いも面白くて、人生をかけてやりたいくらい今はラグビーが大好き。でも日本ではまだ競技人口も多くなく、面白さが世間に伝わっていないのがもったいなくて』。そこで「高校生チャレンジ留学」を活用してラグビーの本場・ニュージーランドに留学し、強豪校の練習に約4週間参加することに！『現地では公園の芝生にラグビーのポールが立っていたり、学校でも昼休みに皆でラグビーをしたりラグビーが暮らしの一部になっていました。印象的だったのは、日本だと“部活”や“プロ”として厳しい練習を重ねて……というイメージですが、現地ではとにかく『楽しむ』ことが大切にされていること。チームプレイでも、ミスしたら『何やってんねん！』じゃなくて『ドンマイ！気にすんな。』という感じで、皆で気分を上げながらプレイする姿勢にグッときました。帰国後は現地で学んだ「楽しみ方」を自らのプレイに乗せてチームメンバーと共有。真剣に、そして楽しく。高校生の挑戦から、新たなスポーツへの取り組みが兵庫に広がっていきます。

ラグビーのおもしろさを
日本に伝えるために、ラグビーが
ポピュラーな国でプレイしたい！

留学した学生たちのインタビューや動画を公開中

高校生チャレンジ留学

～HYOGO高校生「海外武者修行」応援プロジェクト～

兵庫で学び、グローバルな視点・能力を持つ若者を育成するため、留学先で個々の学びを深めたいとチャレンジする高校生を官民協働で支援している取り組み。

担当課のこんな想い

若い段階から世界を肌で感じることは、国際的な視野の中で自分の目標や地域の魅力を再認識することにつながり、何ものにも代えがたい財産となるはず。留学に挑戦する若者が増えていくことを期待しています。



「高校生チャレンジ留学」
WEB



くろ。すむ。おこす。

地元への愛が、地元の暮らしを守る。地元への愛で、新しい世界を切り拓く。

新温泉町 ひとの動き 地域の固有性

日本海に面した静かな町で 職人が手作業でつくる レコード針



1本でも注文がある限り、
つくり続ける



世界的に活躍するDJや神戸・元町のジャズ喫茶のマスターが、絶大な信頼を寄せる小さな「レコード針」。それらを製造しているのは、日本海に面した静かな新温泉町にあるレコード針メーカーJICO（日本精機宝石工業）です。かつて縫い針製造で培われた技術が

レコード針に受け継がれ、いまや世界約200の国・地域のファンになくはない存在。プロが求める“音”を出すために針には微細な調整が求められますが、ひとつひとつ職人が手作業で丁寧につくりあげることによって唯一無二の品質を叶えているのです。

DJの\$HINさんは「最初は他メーカーの交換針として使い始めましたが、使い始めたらその音質や耐久性も申し分ない。JICOが日本の会社、しかも自分と同じ近畿圏だと知って驚きました。MADE IN JAPANの技術力を持ったすごい会社、すごい職人さんがいると多くの人に知ってほしいですね。アナログレコードが減る中でも“注文がある限りつくり続ける”という企業姿勢にも感銘を受けたそう。新温泉町の澄んだ空気と海の匂い、人の手が入り込んでいない“いい意味で時が止まっている”場所だからこそ可能な、微細なものづくり。新温泉町が生んだJICOの職人スピリットはワールドクラスの“音”をつくり出しています。

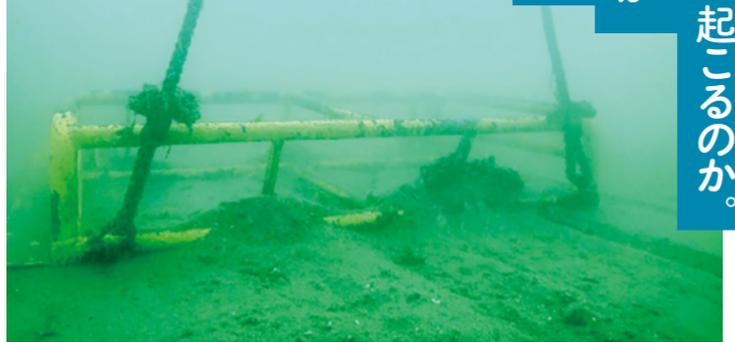
こちらで詳しい記事が読めます

TSUNA5 (U5H)

摂津・但馬・淡路・播磨・丹波という兵庫五国の魅力を再発見し新たにつくっていくU5H = United 5koku of HYOGO (兵庫五国連邦) プロジェクトの一環として、五国にある古き良き技・カルチャー・想いを現代にふさわしいコンテンツの裏側を紹介。



「TSUNA5 (U5H)」
WEB



海底耕うんの様子

なんで「色落ち」が起こるのか。
海苔に必要な栄養が
不足しているからや

地域の固有性

海の底を耕して、 命が巡る豊かな海を守る

長年海苔の養殖に携わってきた明石浦漁業協同組合の戎本組合長。1990年代後半ころから海苔に「色落ち」という現象が目立ち始めたそうです。原因を調べてみたところ、海苔の生長に必要な窒素などの「栄養塩」が不足していることが判明。「昔は山から川を伝って多くの栄養が海に流れ出た。ダムや堰ができた下水処理も整備され、それが海に流れ込まれなくなった。でも海底には栄養が溜まっているや」という話も聞いてね。これを淡路の漁師が強いて耕そうと始めたんです」と「海底耕うん」を始めたきっかけを話してくれました。海底耕うんは、専用の鉄製器具を漁船で引っ張り、硬くなった海底を耕すことで堆積した栄養分を海水中に放出させる取組です。「親の代から残してくれた豊かな海を子・孫の世代にまで残すには、一番現場に近い私たち漁業をしている漁師が感じていることを皆に伝え、今できることをやらなあかんと思っています。栄養が豊富で多様な生物が息づく豊かな海を守り続けるための未来への第一歩が、ひょうごの海で始まっています。



戎本組合長のインタビューはこちらでも視聴できます

ひょうご農林水産ビジョン

中長期的な食と「農」をめぐる情勢の変化を見通した、今後10年間の農林水産業・農山漁村に関する各種施策の基本となる計画。これに基づき、兵庫の強みを最大限に生かした持続可能な農林水産業に向けた様々な取組を推進している。



「御食国ひょうご令和の挑戦」
インタビュー動画

多様な学び・働き方 寛容性

「ミモザ企業認定」で女性活躍を応援！

女性をはじめ「だれもが活躍できる職場づくり」に積極的に取り組む企業は、3年間で198社に。さまざまな業界でミモザ企業が広がっています。



尼崎市 有限会社エビオ

産業廃棄物処理や金属買取を行う同社は、役職者がすべて女性。社員の育児・家庭の問題にも会社として向き合いながら休暇制度や資格取得支援を充実させ、男性社員にとっても働きやすい環境を実現している。



神戸市 アステックホールディングス株式会社

「医療に関わるひとびとの自由な働き方・生き方を叶える」ため、医療系教材システムの開発・制作などを展開。年齢・性別・職種に関係なく活躍と昇進の機会を提供し、多様な視点を活かしたプロジェクトを推進している。



加古川市 兵庫南農業協同組合

東播磨エリアの暮らしを支えるJA兵庫南。地産地消や食の大切さを発信するなど「地域で安心できる暮らしづくり」を、女性の働きやすい環境整備によって自ら実践。時差出勤や時短勤務などを奨励している。

女性の“働きやすさ”は みんなの“働きやすさ”を生み出す第一歩

ひょうご・こうべ女性活躍推進企業(ミモザ企業)

企業が「企業の取組姿勢」「キャリア形成支援」「女性の登用促進」「女性の定着促進(処遇・定着、多様な働き方の支援)」の4つの柱・20項目について自己評価を行い、14項目以上を達成した企業を認定する事業。

担当課のこんな想い

女性がまだまだ少ない職場とされている建設業や製造業でも認定取得が広がっています。県内各地で女性のキャリアアップはもちろん、男性育休の推進等「誰もが働きやすい職場づくり」が進むことを目指しています。若い世代にもミモザ企業を知ってもらいたいという思いから、県内学生とタッグを組み、SNS等によるミモザ企業の魅力の発信を行っているのでぜひチェックしてみてください。



「ミモザ企業
就活女子×理想の働き方
@兵庫」
Instagram



居場所・役割 寛容性

一方通行な支援ではなく 歩み寄りで「ここが居場所」と 思える社会に

国籍に関わらず、ひょうごに暮らす一人ひとりが自分らしく生きられる社会を創出するために、必要なことは？県内で外国人への教育支援に注力し、多文化共生分野の実務者会議で座長を務める乾 美紀教授にお話を伺いました。

外国人の子どもたちと
関わって自分がグローバルに
成長してるなああって感じます



乾 美紀さん（兵庫県立大学 環境人間学部教授）
ラオスからのモン難民との出会いを機に、現地で調査を重ね博士号を取得。
専門は多文化共生教育・国際教育協力。

外国人への教育支援に興味を持ったきっかけは、アメリカでの“モン難民”との出会い。日本語教師として働いていた学校に、ラオスからやってきたのが彼らでした。言葉が通じなくても、同じアジア人同士。現地の子どもが敬遠する日本食も喜んで食べてくれたり、懐いてくれる子どもたちがとにかく可愛くて。アメリカ人に日本語を教えるより、モンの子どもに英語を教える方が楽しくなっちゃいました。同時に、ラオスを追われることになった歴史的背景や現地の教育環境を探るようになって、今も研究を続けています。

帰国後、兵庫にもラオスの難民いるのかな？と調べて会いに行くと、アメリカとの支援の格差にショックを受けました。特に教育面で、高校進学がままならない状況に苦しんでいる若者が多かったんです。同じ世代でも、アメリカと日本、どちらに逃れるかでこんなにも違うのかと。一見、どこの国の人か分からなかったり、自助組織がなかったり。そんな“目立たないマイノリティ”を助けたいという気持ちが強くなりました。人生に多様な選択肢を持つためにも、高校を卒業することが必要だと感じています。

もうひとつ、子どもたちに勉強を教えるボランティアに参加して感じるのは、居場所の大切さ。母語で話せる、自国のことを自由に話せる場があることが嬉しいみたいで。勉強道具を持たずに、お喋りしに来る子もいるくらい。「先生、ネパール語喋られへんの？」「ごめんね〜わからへんねん」って言いながら教わったり、気づいたらネパールカレーに詳しくなっていたり。私も視野が広がって、自分が“グローバル化”している実感があります。一方的な支援というより、お互いが歩み寄りって同じ目線に立って理解を深め合う。これからの多文化共生に必要なことだと思います。まずはイベントを覗くだけでも。本場のフードや文化に触れながら、地域の外国人と交流するのも楽しいですよ。

多文化共生社会検討実務者会議

外国人県民の増加に伴い、日本語教育をはじめとする多様な課題への対応が必要であることから、実務者会議により県と市町が協議し、今後の取組を検討。

つなぐ。

加古川市 居場所・役割

「楽しい」を軸に 集う、考える、活動する。 まちが動く力になる。



心のモヤモヤは
もっと大事にしたほうがいい

「これからの社会には、モヤモヤをちゃんと出す場が必要」——そう話すのは、加古川市でNPO法人シミズシーズの代表を務めるすこいすとのひとり、柏木登起さん。大学卒業後、「社会全体を知るにはまず企業で」と考え、企業の営業職に。その後、人手が足りないから手伝ってほしいと言われたのをきっかけにNPO法人の職員になり、障がい者の就労支援事業所や他のNPO法人の立ち上げ支援などに関わったそう。その一方で、社会的な役割に意義を感じつつも、さまざまな社会課題に対して「組織への支援だけでよいのか」と疑問に感じられたそう。その想いは“市民”の言葉が入ったNPO法人シミズシーズの名称に現れています。

「誰もが市民という役割を楽しめる社会へ」——柏木さんたちは法人の「らしさ」や価値をあらためて話し合い、これからの社会を見据えて、自分らしく生きるための環境を自分でつくっていくという「市民の自律と自立」に支援の焦点を当てています。「心のモヤモヤをもっと大事にしたほうがいい」と思っていて。地域だけでなく、組織でもそう。おせっかいかもかもしれないけど、みんながモヤモヤしていることを話せて、自分のやりたいことを実現できる場があふれたらいいですね。



柏木さんのインタビューはこちらでも読めます

すこいすと

「自分×仲間×地域」の熱量を携える「ひと」、すこいすとを紹介するウェブメディア。すこいすとたちの活動を通して、地域の活力となる「参画と協働」のヒントを発信している。



「すこいすと」
WEB

かんじる。こころみる。

子どもも、若者も、高齢者も、外国人も。地元への愛が結ぶ、人と人の絆。



晴れやかな表情で言葉を交わす木南さん(左)と山崎さん(右)

周囲とのつながりが
前向きにさせてくれたのかも

次代につなぐ 安心した暮らし

自分たちの言葉で 「あの日」を考える。 「これから」を考える。

阪神・淡路大震災から30年。当時はまだ生まれていなかった若い世代が、自分たちで考え、取材をし、自分の言葉で綴る「リメンバー117」プロジェクト。ある人は避難所の炊き出しについて、ある人は東日本大震災で神戸に避難してきたクラスメイトについて記事を書きました。その中の一人である山崎天智さんは就職活動中、大学4年生で震災を体験した木南さんに話を聞くことに。「木南さんは被災直後の3月に留年が決まって大学院進学を断念し、急遽、就職活動をするようになったそうです。被災、留年、就職。そんな中、ボランティアとして被災者支援にも積極的に動かれました。私が同じ立場なら凹んで立ち直れないと思うのですが、なぜ落ち込まずにいられるのですかと聞くと『どうせ生きてんやったら、楽しく生きた方がいい』と話されたんです。取材を通して自身の就活の不安やその原因などに気づき、前向きにいられるヒントを見つけたそう。

また、グランピングである出来事を題材にした松林勇希さんの記事では、真冬のグランピングでエアコン故障、1人あたり6〜7分しか使えないシャワーなどから、「当たり前」が「当たり前」であるのは、じつはすべてにおいて「不自由なく」恩恵を受け続けているからだと語られていました。1995年1月17日を経験した人だけではない、それぞれの世代や立場で考える「あの日」は、兵庫の未来を拓く大きな力になるはず。



リメンバー117サイト

他にもたくさんの記事を読めます

リメンバー 117

公募で集まった18歳から25歳までの14人が、阪神・淡路大震災や防災についての記事を作成し、震災30年事業の締めくくりとして同事業の特設サイトで発信する県のプロジェク

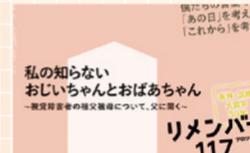


「リメンバー117」WEB

(こんな記事も、あんな記事も。)



母と祖母のつくったご飯が大好き。避難所の炊き出しをしていた方はどんな気持ちだったんだろう。
——朝原 令



視覚障害者の祖父と祖母。もし、地震があったなら。初めて考えた障害者の支援。
——楠本 明日香



共に歌うだけじゃなくて、歌を通して誰かを励ます。「歌」の力を体感した1.17震災祈念コンサート
——金原 美蕾

淡路市 居場所・役割 安心した暮らし

地域に支えられて。 子育ての拠り所にもなる助産院

出産を機に神戸からふるさとの淡路島にUターンした助産師の藤岡勢子さん。住み始めてから気づいたのは「今の淡路島には移住者が多い」こと。しかし移住者は、両親が近くにいないだけでなく、友達づりが難しいこともあり、とくに出産・育児で孤立する人もいるのではないかと考えたそう。そこでどんな人でも助けを求められる・相談できる場を立ち上げようと、思い切って助産院を開業しました。

とはいえ自身も子育て真っ只中。24時間365日助産院にかかりきりになる中、小学1年生の娘さんの話し相手に近所のおじいちゃんになってくれたり、知らないおばあちゃんが「ちょっとお菓子食べていき」と声をかけてくれたり。「この地域では、今もまわりの人が一緒に子育てしてくれているんだなって、身にしみて感じています」と自身の小さい頃と重ね合わせる藤岡さん。

実際に頼るところがなくて夜中に「助けてほしい」と電話がかかってきたこともあるそう。「2、3時間お子様を預かってゆっくり寝てもらいました。そうしたらお母さんも笑顔になって。その経験から、最近は一時期預かりも始めたんです。誰かを頼って子育てするって悪いことじゃない。私はみんなにそう言っているんです。うちの子も私が周りに頼ることで、たくさんの人に育ててもらって、めちゃくちゃ愛されているなって思いますから」。藤岡さんが目指すのは、出産だけでなく子育てで困った時にも帰ってこられる場であり続けること。誰もが安心して子育てできる社会を実現するための大きな一歩がスタートしています。

藤岡さんの動画も観られます

ひょうごビジョン 2050

人口減少、少子高齢化、グローバル化、技術革新、気候変動など、社会が直面する大きな変化に対応し「兵庫らしい未来」を創造するための指針。ウェブサイトでは、実際にめざすべき未来の実現に向けて新しい生き方・働き方を考え行動を始めている人々を紹介。



「ひょうごビジョン2050」WEB



もっと誰かを頼って
子育てしたっていい!





山と水、美しい自然があるからこそ、おいしさ満喫！

丹波市 地域の固有性 ひとの動き

五国の魅力を五感で楽しんでみる

2025年大阪・関西万博をきっかけに始まった、県内全体をパビリオンに見立てた「ひょうごフィールドパビリオン」。五国それぞれの魅力がある兵庫県は、実際に足を運べば、地域ごとの自然や文化を楽しむことができます。「U5H」プロジェクトのスタッフが丹波篠山を訪れ、その地ならではの魅力に迫りました。



※たぐいまれ一般の方の蔵内見学は募集しておりません



こちらで詳しい記事が読めます！

万ばくばくー勝手に楽しむ “ひょうごフィールドパビリオン” (U5H)

摂津・但馬・淡路・播磨・丹波という兵庫五国の魅力を再発見し新たに つくっていくU5H=United 5koku of HYOGO(兵庫五国連邦)プロジェクトメンバーが、“ひょうごフィールドパビリオン”を体感し、おいしいもの・美しいものに触れながら現地の魅力を発信するウェブメディア。



「U5H」万ばくばく WEB

①NさんはU5Hスタッフ内でも随一の旅好き・お酒好き。広報ディレクターのKさんは、丁寧な暮らしぶりとお酒好きのギャップが魅力。つまり、ふたりの共通項は“お酒”です。まずは日本六古窯のひとつ「陶の郷」で、お気に入りの酒器を選んで、体験スタート！

②続いて170年以上の歴史をもつ西山酒造場で、ものづくりの裏側を見学した後、5種類の日本酒を次々と試飲。本日のお気に入りを選びます。美味しいお酒に合わせるために、地元の新鮮な野菜を味土里館で仕入れました。

③そして、目指したのは廃校利活用施設の「FOREST DOOR-旧神楽(しぐら)小学校-」。ふたりが“青空宴会”の場に決めたのは開放感のある校庭の朝礼台です。テーブル兼椅子として、さらにKさん持参の野燗炉(のかんろ)で熱燗も準備。

④青空のもと気持ちのいい風を頬に感じ、山の迫力と美しさを目で楽しみ、丹波篠山の酒器でお酒も食材の香りも味も歯ごたえもたっぷり堪能。ふたりともいつも以上に話が弾んでしまったそう。でも、五国の魅力はこれだけではありません。皆さんも、ぜひ五感で体験してみてください。

経済活力

一人ひとりが地域の できることは？ —学校園で学び、考える—

ある日、芦屋市立西蔵こども園の5歳児が、使われなくなった旧園舎にお散歩に出かけたときにこうつぶやいたそう。「このあじさいは皆に見てもらえなくてかわいそう。そこで一人一本ずつあじさいを園に持ち帰り、挿し木に挑戦！現園舎の目の前にあじさいの花壇を作り、「にしくらカラフルあじさい通り」と命名することに。他にも植え替えの方法、肥料の種類、腐葉土づくりなどあじさいを通して学び、さらに近隣の高齢者とのつながりを生み出すなど、主体的なSDGsへの活動は「ひょうごSDGsスクールアワード2024」に選出されました。

「このあじさいは元気がないねえ」「どうしたらいいかなあ？」



あれも、

まだまだある、地元を愛する

川西市 次代につなぐ 安心した暮らし

自然と共に。自分たち



虫生川周辺の自然を守る会 代表 菅原 八重子さん

一面にひろがる白い花。なんとも幻想的で……、守りたいと



コナラ群落に咲くシロバナウンゼンツツジ。4月下旬に満開をむかえる。

環境を守るために



また、日本海に面した香美町の香美町立柴山小学校に通う子どもたちは、自分たちの生活を支える地元の海でカヌーを体験。身の



回りの環境や自然を体感しながら学び、その素晴らしさを再発見する授業が行われています。また、地域の人を講師に招いて海の漂着物調査も実施。近隣の環境を見つめ直したり、将来の環境を考えたりすることで持続可能な環境保全への一歩を踏み出しています。ひょうごの豊かな環境を未来に残すためのユニークな試みが、さまざまな学校園で始まっています。

他にもユニークな試みがいろいろ

ひょうご SDGs スクールアワード

ひょうごの豊かな自然環境、人的資源、伝統文化、特産品などを活用し、子どもたちが主体的にSDGsに関する活動を行う県内の学校園を表彰する事業。多様な地域資源を次世代に引き継ぐために兵庫県が推進するSDGs施策の一つ。

※令和7年度から「ふるさとひょうごSDGsスクールアワード」へ名称変更



「ひょうごSDGs
スクールアワード」
WEB

これも。

こんな取り組み、あんな取り組み。

の森を自分たちで育てる



活動の拠点場所。
高齢で保全活動の引退後も
お茶をしに訪れる人もいます。

たったひとりで始めたゴミ拾いから、森を再生させてしまったボランティア。それが、菅原八重子さんです。植物が好きな菅原さんは近所を散歩していた時、ゴミだらけで荒廃してしまった森に驚きます。「荒れ果てた森は怖くて住民も近づけない場所」になっていると危機感を覚え、片付けを開始。ひとりで笹刈り、倒木を片付ける姿に、次第に仲間が増えていきました。4年後、ボランティアの手により森は本来の姿を取り戻します。さらに偶然見つけたシロバナウンゼンツツジの保全活動を経て、今ではイベント開催や小学校の森林環境学習を受け入れるほど、多くの人が関心を持つ森に育ちました。また他地域では、竹林が手入不足になると周囲の森林を圧迫することから、タケノコ掘りや伐採などにより竹林や周囲の森林を保全する活動もあります。「自然は単なる資源ではない。人が手をかけ共存していく存在である」と、県内各地で日々行われているさまざまな森林ボランティア活動によって、人と自然が共存する豊かな森というバトンが次世代へと大切に引き継がれていきます。

兵庫県森林ボランティア団体連絡協議会

身近な森林や自然環境を守ろうと県内でおよそ200の森林ボランティア団体が活動中。兵庫県として、団体間の連携・情報交換の強化や活動を県民に広く紹介する「兵庫県森林ボランティア団体連絡協議会」を設立し、森林ボランティア活動の輪を社会全体で広げ深めている。



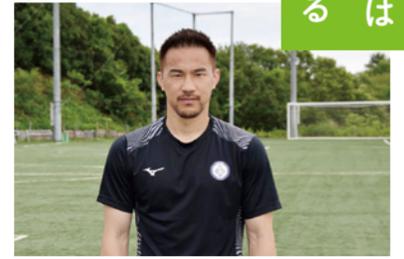
「兵庫県森林ボランティア
団体連絡協議会」
WEB



地域の固有性

スポーツの力で地域の一体感を高める

批判や、自分以外の選手の存在が力強いエールになった——。そう選手時代を振り返るのは宝塚市出身の元プロサッカー選手、岡崎慎司さん。「僕は批判もエールと捉えています。認めてもらうことは嬉しいけれど、それだけでは満足しちゃって自分で限界を決めかねない。批判は悔しいけれど“なんとかしてやろう”という力になります」と断言。また海外でまったく注目されず辛かった時期には、「香川真司や柴崎岳という同じ境遇の選手の頑張り自体が、自分にとってのエールになった気がする」とも。サッカー人生において「自分では行けない場所に手を伸ばし続けて



どんな批判だって、
僕にとっては
エールになる

こられたのは、批判も含めそうした“自分以外の存在”との出会いが根底にあったから」と実感しているそうです。現在は兵庫県と包括連携協定を結んだFCパサラ兵庫の理事を務めるなど、指導者側になりました。けれど選手時代と同じスタンスで、スポーツを通じた県の盛り上げや地域交流に積極的に取り組み中。例えば、県内の小中高生が約100名も参加したサッカー教室は、岡崎さんの熱意溢れる指導で大いに盛り上がりました。「今度は自分の姿がエールになれば嬉しい。岡崎さんのチャレンジは続きます。

岡崎選手のインタビューはこちらで読めます

私にとっての YELL

兵庫ゆかりのアスリートやスポーツ関係者の方々の「私にとってのYELL」を発信。さまざまなスポーツシーンに存在する“YELL”を県民の皆さんや企業・団体の皆さんと分かち合い、広げ繋げていくことを目指す。



HYOGO with SPORTS
「私にとっての YELL」WEB

行く人が変われば
楽しみがどんどん増えていきます！



三田市 地域の固有性 次代につなぐ

大学生が自分たちの視点で博物館・美術館の魅力を発信

◆「5歳の私と同じ場所とポーズで写真を撮る!」と意気込み、人と自然の博物館を母と訪れたカヌレさん。当時の写真は、ズラリと並ぶ標本の前で蝶のように大きく手を広げる姿。しかし、いざ現場に立つと「22歳の私には恥ずかしくすぎる」と躊躇します。時の流れは標本を充実させただけでなく自身の羞恥心にまで影響したのです。でも今だからこそその発見も。阪神・淡路大震災の記録映像の前で佇む母の姿を見て、「変化するものいい、でも変わらず後世に伝えるべきものもある」と実感。時を経て“あらためて知る魅力”があると発信しました。



幼少期のカヌレさん

現在のカヌレさん

◆常設展に魅せられ、1年に3回も歴史博物館を訪れたfleurさん。最初は親族9名で、玩具コーナーで各世代のなじみの玩具で盛り上がり。次はサポーターズメンバーと訪れ、史学専攻のメンバーの解説でさらなる魅力を発見。最後は久々に帰省した友人と全国のお城コーナーで話が弾みました。そこで得たfleurさんの答えは「常設展は何度でも楽しめる!」。一緒に見る相手が変われば、新しい感動を得られるということを発見したのです。

——学生ボランティアたちが感動や発見を等身大で発信する「HYOGOミュージアム魅力発信プロジェクト」。今日もまた新たな魅力を伝えようと奔走しています。



◆常設展に魅せられ、1年に3回も歴史博物館を訪れたfleurさん。最初は親族9名で、玩具コーナーで各世代のなじみの玩具で盛り上がり。次はサポーターズメンバーと訪れ、史学専攻のメンバーの解説でさらなる魅力を発見。最後は久々に帰省した友人と全国のお城コーナーで話が弾みました。そこで得たfleurさんの答えは「常設展は何度でも楽しめる!」。一緒に見る相手が変われば、新しい感動を得られるということを発見したのです。

学生が書いた記事は他にも!

HYOGO ミュージアム魅力発信プロジェクト

学生ボランティア「ヒョーゴ・ミュージアム・サポーターズ」が県立の博物館・美術館を訪問。若者の視点を通して、その魅力をウェブサイト(FUN!FUN?MUSEUM!!)やSNSで発信し、県民のミュージアムへの関心と利用促進を図るプロジェクト。



「FUN!FUN?MUSEUM!!」
WEB

つなぐ人も、つながりたい人も にぎやかに集まった一日!

カケルDAY ひょうご地域創生フェス2025

2025年8月30日に「KIITO」で開催され、会場は一般参加者を含めた1,000人以上でにぎわいました。当日の会場の様子をレポートします!



ひょうご地域創生フェス「カケルDAY」とは

各地で地域活性化に取り組むプレイヤーが一堂に会し、交流・発表を通じた新たな出会いと価値を生み出すことを目的とした「地域創生が体験できるフェス」。



「カケルDAY」
詳しくはこちら



出展者も参加者も、業種や分野を越えて、皆刺激的な交流を楽しんだ。



福祉活動のPRブースでは、
思考力・体力を育む忍者体験が大人気!



炭×林業⇒地域活性化

神戸で炭火焙煎珈琲を提供していますが、今後は「炭×林業」で地域貢献がしたい。今日は販売のかたわら多くの人と交流し「人手が少なくてもできる農業」のアイデアをたくさんもらいました。異業種交流ができる機会は貴重ですね。

萩原珈琲 代表 萩原英治さん



5分でできる避難訓練

僕も阪神・淡路大震災の被災者ですが、「防災」がいまだに堅い言葉で悔しいです。「楽しい」を入りに、気軽に避難訓練できる地域にしたいと活動中。今回、子どもたちが何回も楽しんでくれたので、ここから防災意識を広めたいですね。

株式会社マインズ 末澤弘太さん

2メートルを超える大工体験も。 リズムカルな作業音が会場に響いた。

工作などの体験型アクティビティを楽しむ子どもたちの姿も。▶



パタカぼ大作戦!?

バターナッツかぼちゃを人気野菜にするため参加しました。「パタカぼ大作戦」は地域のコミュニティづくりが目的。子どもは栽培を通して計画性を学び、困ったときは大人に聞くことで問題解決力も育ちます。パタカぼを起点に地域を盛り上げたいですね!

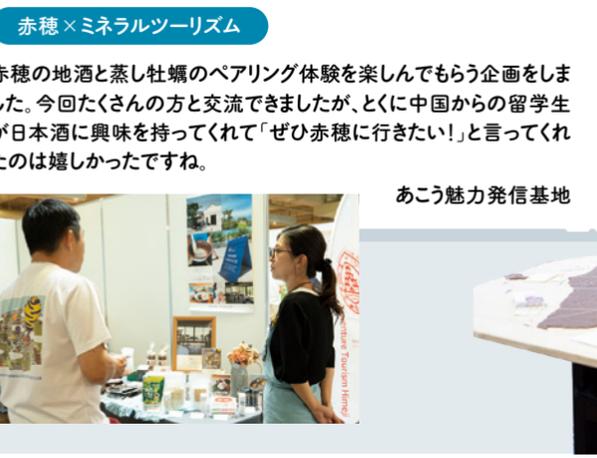
いなかラボ 代表 池田勇樹さん



赤穂×ミネラルツーリズム

赤穂の地酒と蒸し牡蠣のペアリング体験を楽しんでもらう企画をしました。今回たくさんの方と交流できましたが、とくに中国からの留学生が日本酒に興味を持ってきて「ぜひ赤穂に行きたい!」と言ってくれたのは嬉しかったですね。

あこう魅力発信基地



淡路島×建築×ウェルビーイング

最先端の技術で全部つくるのではなく、地方の個性を活かしたものづくりがカッコイイと思います。今回は淡路島を中心につながりが増えたらと思い、島の地図にピンを立ててもらった企画をしました。ピンにルールはなく、「おすすめの場所」でも「おじいちゃんの家」でもOK!最後にはいろんなピンが立ち、交流も生まれて楽しかったです。

建築家 泰健二さん



ステージイベントも 大盛り上がり!

どのピッチもアイデアと地元愛に満ちたものばかり。多くの聴衆から質問も飛び交った。



フェスに参加された アクション委員会 委員より一言

地域の元気にしようとする人たちの背中、学生たちの将来の選択肢を広げる力にもなる
——上村委員長

カケルDAYの盛況ぶりにびっくり!プレイヤー同士のつながりは県の力になるはず
——西山委員

カケルDAYをきっかけに人の想いがカタチになっていく素晴らしい!ぜひ継続したい
——岡本委員

「誰かのために」が原動力になっている活動が多く、これこそ「ひょうごらしさ」では?
——安枝委員

地元の学生も巻き込んでプレイヤーの活動をもっと盛り上げたい!
——桂委員

横同士のつながりによって地域の活動はもっと元気になる。交流による価値創造 = 地域創生だと思
——飛田委員

発掘されたユニークな取り組みを、「面白がりながら」どう育てていくか、考えたい
——富田委員

アクション委員会って?

地域創生のプロジェクトをさらにパワーアップさせるため、現場の最前線で活動するメンバーが集結。「兵庫県地域創生アクション委員会」では、兵庫に変化を起こすべく、どうすればもっと地域が良くなるか、想いが伝わるかについて、枠にとらわれない自由なアイデアをぶつけ合っています。